

トピックス

第9回国際肥満学会議印象記

共立女子大学家政学部

井上 修二

第9回国際肥満学会議(ICO)は本年8月24~29日の5日間にわたって、ブラジルのサンパウロで開催された(図)。開催が8年前のIASOのgeneral council投票で決まった後は、ブラジルの肥満学研究はほとんどないに等しいことに対し、学会の学問水準に対する危惧があった。さらにその後に出現したブラジル経済の混乱による治安の問題から開催すら危ぶまれたが、約3,200名と国際肥満学会議上、最大の参加者があって、無事終了した。

この成功には、IASO中央役員の協力、IASO南半球支部役員の努力と、肥満薬が南米でも上市されたという幸運が重なったためと思われる。

学会プログラムは第7回ICOで骨格が示された第1分野: Adipose Tissue Biology, 第2分野: Genetics of Obesity, 第3分野: Prevention, Behavioral Aspects and Childhood Obesity, 第4分野: Epidemiology and Health Implications, 第5分野: Regulation of Energy Balance, 第6分野: Management and Treatment, 第7分野: Continuing Medical Education に従って分類され、IASOから各々の分野の責任者と委員会を設ける形で進められた。このような綿密な企画によって進められた結果、学問的にもかなり高い水準の会議となったことは喜ばしいことである。

第1日目は登録のほか、3つのawardが発表された。Willendorf Award(臨床)はスウェーデンのLars Sjöströmの“減量による虚血性心疾患のリスク

軽減を示した、ヨーロッパ諸国を巻き込んだ大規模な組織的研究”に、Wertheimer Award(基礎)はフランスのDaniel Ricquierの“Uncoupling Proteinsの研究の進展と現状”に、André Mayer Award(若手研究)はイギリスのDavid Allisonの“肥満に關与する遺伝子の意義”に授与され、これらの3つのplenary lectureが行われた。このレベルの研究ならば、日本肥満学会会員のなかにもっと優れた研究があるように思えたので、今回は本学会もできるだけ早く応募体制をひくべきであるという感想を持った。

この3つのplenary lectureを含め、本学会は15のplenary lecture, 12のmeet the professor, 30のsymposium, 9のtutorial(研究方法論の解説), 15のeducation symposium, 3つの製薬会社スポンサーによるsymposium, 7つのDebate(論議中のテーマの討論)と約700題の一般演題で構成され、現在の肥満研究の状況をよく反映しているプログラムであった。

本学会は一般演題にも工夫がみられ、応募演題から5つの優秀論文を選び、New Investigator Award Finalistsのsessionを設け、このなかから発表後、1つの論文にNew Investigator Awardを与えた。また、最近のhot topicsの演題を会期中、ポスター掲示を行うsessionに16演題を選び、一般のポスター発表とは異なる、目立つ発表形式を採用した。そのほか、一般演題のなかからと若手の活躍研究者の

招待演題を加えた15のmini-symposiumも加えた。さらに一般演題のなかから412題の口演発表の機会を設け、一般演題応募者の半数強が口演演題となり、応募者には励みとなったのではないかと感じられた。

日本からは松澤佑次新理事長がadipocytokinsのtopicsでmeet the professor sessionとvisceral fatの測定法でcontinuing educationのsymposistと指名され、門脇孝評議員がPPAR、下村伊一郎評議員がアディポネクチン、小川佳宏評議員がレプチン、中里雅光評議員がグレリンのテーマでmini symposiumに招待された。齋藤康常務理事、佐藤祐造常務理事、池田義雄理事らと私がplenary lectureやsymposiumの司会者に選ばれた。また、田中茂穂会員、富樫健二会員が一般演題、口演sessionの座長を務めた。今回は日本からの参加者が約50名と少なかったが、比較的目立つ役割を果たしたものと考えられた。しかし、本学会の研究レベルからはもっと活躍し得るものと考えられた。肥満学は分子生物学的、生理学的、組織学的手法による基礎的研究の発展と、肥満薬の開発による臨床研究の発展が今後も一段と進歩していくものと思われるので、本学会員の一層の活躍を願うところである。



図 第9回国際肥満学会議の様子